

学 年
高

むかしの人の感じ方は？

年 組 名前

次の文は、今から約千年まえに書かれた随筆です。(1)(2)のように読んでみましょう。(3)はあなたの考えを書きましよう。

まくらのそうし
枕草子

せいしょうなごん
清少納言

春は、あけぼの。

ようよう
やうやう白くなりゆく山ぎは、

あ
すこし明かりて、紫だちたる雲の、

細くたなびきたる。

春は、夜明けがよい。
だんだん白んでいく山際の空が、
ほのかに明るくなって、むらさき色の雲が
細くたなびいているのがよい。



- (1) 題名から口語訳までを読んでみましょう。
- (2) 題名から本文四行までを次のように読んでみましょう。

- ① 声を出して読みましよう。
- ② 少しゆっくり声に出して読みましよう。
- ③ 口を大きく開けて読みましよう。
- ④ 一行見ても、紙を見ないで読んでみましよう。
- ⑤ 間違えずに、最後まで読んでみましよう。

(3) 春は、あけぼの(夜明けがよい)と書かれています。他の季節はいつがよいと思いますか。あなたの考えとその理由を書いてみましよう。

夏…

(理由)

秋…

(理由)

冬…

(理由)

学 年
高

むかしの人の感じ方は？

年 組 名前

『枕草子』の続きは次のようになっていきます。
清少納言の感じ方を味わってみましょう。

夏は、夜。

月のころは、さらなり。

闇やみもなほお。蛍ほたるの多く飛びちがひいたる、また、

ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くゆも、をかおし。

雨など降るも、をかおし。

秋は、夕暮ゆうぐれ。

夕日からすのさして、山はの端ちこいと近ちこうなりたるに、

鳥からすの、寝ねどころへ行くゆとして、三みつ四よつ、二につ三さんつなど、飛びいそぐさへえ、あはれなり。

まいて、雁かりなどの列つらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかおし。

日入りはてて、風の音、虫ねの音など、はた言うふべきにあらず。



冬は、つとめて。

雪の降ふりたるは、言うふべきにもあらず。

霜のいと白しろきも。

また、さらでもいと寒ひやきに、火かなどいそぎおこして、炭すすもてわたるも、いとつきづきし。昼ひるになりて、ぬるくゆるびもていけば、火かをけの火かも、白しろき灰はいがちになりて、わろし。

夏は、夜。月が出るころは、言うまでもない。月が出ないやみの夜もまたよい。ほたるがたくさん飛んでいるのも たった一つ二つと、かすかに光って動いていくのも、趣がある。雨が降る夜も、また趣がある。

秋は、夕暮れがよい。夕日がさして、山のはしにとても近づいたころ、からすがねぐらに帰るのに、三つ四つ、二つ三つ群れをなして、急いで飛んでいるようすも心ひかれる。まして、かりが列を作って飛んでいるのが、たいへん小さく見えるのは、ほんとうに興味深い。日がすっかりしずんだ後、ふと聞こえる風の音や虫の音は、これまた言うまでもなくすばらしい。

冬は、早朝。雪がふっているのは言うまでもなくすばらしい。霜がたいへん白く降りたのもよい。また、雪や霜がなくても、たいへん寒い朝に、火を急いでおこして、炭を部屋へ運ぶのも、とても冬の早朝にふさわしい。昼になって、だんだん寒さがゆるんで暖かくなると、火ばちの火も、白い灰になってしまつてよいかんじがしない。

